胃腸内科・外科・内科・肛門外科・循環器内科 soyama-clinic.com

ふれあい曽山医院

志筑1391−9
Tel:62-5566

2026年11月号
(第165号)

発行人
曽山　信彦



編集委員会



曽山医院
ホームページ
soyama-clinic.com

高齢者の肺炎を防ぐワクチンが進化しました

「20種類の型」に対応した新しい定期接種

肺炎は日本人の死因の上位にある重大な疾患であり、肺炎で亡くなる方の97%以上を65歳以上の高齢者が占めています。そして、その肺炎の原因として特に警戒が必要なのが「肺炎球菌」という細菌です。2026年4月から、その肺炎球菌に対するワクチンが大きく進化し、高齢者の定期接種制度が刷新されました。

■ 肺炎球菌とは　どんな細菌ですか

肺炎球菌は、私たちの喉や鼻の奥に潜んでいることがある細菌です。健康な状態では無害に共存していますが、肺炎だけでなく、血液中に細菌が侵入する敗血症や、脳を包む膜に炎症が起きる髄膜炎など、命に直結する重篤な感染症を引き起こすこともあります。

高齢者が侵襲性肺炎球菌感染症（細菌が血液や髄液に入り込む重篤な状態）に罹患した場合の死亡率は30〜40%に達することがあると報告されており、決して軽視できない感染症です。特に心臓病・腎臓病・糖尿病・呼吸器疾患などをお持ちの方こそ、このワクチンの意義が大きいとされています。

■ 肺炎球菌には「型」がある

肺炎球菌には90種類以上の「型（血清型）」が存在します。型によって感染力や重症化しやすさが異なり、ワクチンはその型に合わせて免疫をつける仕組みのため、「何種類の型をカバーできるか」が性能の重要な指標になります。

これまで高齢者の定期接種に使われてきたワクチンは「23価多糖体ワクチン」と呼ばれるもので、23種類の型に対応していました。

ただし、このワクチンは「抗体はできても免疫の記憶が残りにくい」という特性から、5年ごとの再接種が必要とされていました。

■ 新しいワクチンの特徴は何ですか

2024年8月に高齢者・ハイリスク者への使用が薬事承認され、2026年4月から高齢者の定期接種ワクチンとなった新しい20価肺炎球菌結合型ワクチンは、20種類の血清型に対応しています。

この「結合型（コンジュゲート）」という技術が重要なポイントです。



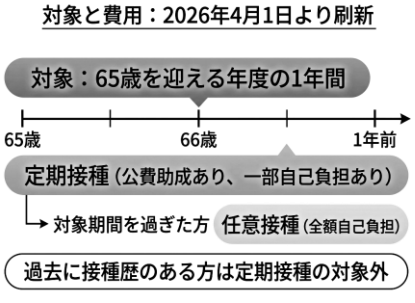
20価結合型
ワクチン

ワクチンの抗原（免疫を刺激する成分）をタンパク質と結合させることで、免疫細胞に記憶を残しやすくした仕組みです。

これにより、ウイルスや細菌が再び侵入してきたときに素早く強い免疫反応が起きるよう体を準備させることができます。

最新の学会ガイドライン（2026年4月）では、この新しいワクチンの効果は5年程度持続すると推定されており、従来のワクチンのように定期的に繰り返し接種する必要はないとされています。

■ 誰が対象で、費用はどうなりますか



2026年4月1日から、65歳時の定期接種が従来の23価多糖体ワクチンから新しい20価結合型ワクチンへ変更されました。定期接種の対象は原則として「65歳を迎える年度の1年間」で、自己負担は一部にとどまります。

定期接種の対象となる65歳の時期を過ぎてしまった方でも、任意接種（自費）として接種することは可能です。

高齢者における肺炎予防の意義は大きいため、選択肢としてご検討ください。

なお、過去に肺炎球菌ワクチンをすでに接種したことがある方は、定期接種（公費助成）の対象外となります。以前に接種済みの方の今後の対応については、かかりつけ医にご相談ください。

■ まず65歳でのご相談を

肺炎は「高齢になればなるほど危険」な感染症です。

65歳になったら定期接種のお知らせを見落とさず、ぜひかかりつけ医や地域の医療機関にご相談ください。

1回の接種で備えられる予防手段が、今まさに手の届く場所に整っています。

